The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

浄源の『不真空論』に対する華厳的な捉え方

――「不真空」と「真心」の解釈について――

王　頌

浄源の『肇論・不真空論』に対する注疏は、色々のところで彼の教学の特徴が顕れてくるのであるのが、ここでは、彼の「不真空」と「真心」の二つの概念に対する捉え方を取り上げて、分析していきたいのである。

先ず、「不真空」について、『不真空論』には次のような言葉がある。

尋夫立文之本旨者、直以非有非真有、非無非真無。欲言其有、有非真生。欲言其無、事象既形。象形不即無、非真非実有。然則不真空義、顕於茲矣。故放光云、諸法仮号不真、譬如幻化人、非無幻化人、幻化人非真人也。[1]

言うまでもなく、僧肇の原文に見られる「有」と「無」は一対の概念として対立させて、あらゆる物が真の物ではなく、その本性がもともと空であることを示すものである。これらの僧肇の原文と次の唐代の元康の注釈文とを合わせてみれば、僧肇の立場を明確に理解することができる。

諸法虚仮、故曰不真。虚仮不真、所以是空耳。[2]

要するに、諸法の虚無性を「不真」といい、その本質を空と把握し、それは、「不真空」という。

上掲『不真空論』の原文に対して、浄源は次のように解釈している。

① 直以非有非真有、非無非真無。非不也。演義云、以不不之、故云不真空矣。（令模鈔・不真空）

② 幻有即是不有有、真空即是不空空。不空空故名不真空、不有有故名非実有。非空非有、是中道義。（中吳集解・宗本義）

③ 論第一真諦也者、…（中略）…乃是妙有之真空、非無物為空、故云第一真諦也。（令模鈔・不真空）

先ず、この三つの引用文のうちの①は、上掲僧肇の原文に対する浄源の直接の注釈である。これだけで意味ははっきり伝わらないので、②と③の説明が必要となる。②は①とは直接関連があり、澄観の『華厳経疏』巻一四の言葉[3]を引用して『中吳集解』の「宗本義」の部分で書いているものである。そして、③は①と②の立場からさらに進んで浄源自身の主張を

NACSIS-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

打ち出したものである。

浄源の三つの引用文で述べられた重要な概念の繋がりを纒めて見ると、以下の関係を見だすことができる。

A　不有有―非実有――――幻有――（空）

B　不空空―不真空（不断空）―妙有―→真空

AとBの概念は互いに一つずつ対応しているが、A・Bそれ自体も自己の体系を形成している。さらに分析すると、以下の結論が得られる。

第一に、前掲引用文②の「不真空」という言葉は、筆者の管見の限りでは、澄観の創作であると考えられる。浄源が改めてこの言葉を用いたことは、彼が空を支える何らかの実在性を見つけようとする意図が強く見られる。更に考察を進めれば、これは「真心」説を提出する理論的な前提であると考えられる。

第二に、同じ②で示されたように、浄源は「不真空」を「不空空」の別名と理解している。即ち、浄源においては「不真空」と「不空空」とは、本質においても理論的な役割においても全く同じであると理解してよい。この点については留意する必要がある。②の「真空」が即ち「不空空」、「不空空」と「不真空」とは異ならないという論述から、Bの「不空空」から「不真空」ないし「真空」までの繋がりは、空を単なる空虚のこととして認識しないことが正しい空の理解であることを意味することがわかる。要するに、インド中観派が全てを否定してあらゆるものの本質を空として認識したことに対して、空、或いは仮の後ろに常に実在するところの、何らかの高次の実在者の観念を第一に位置づけようとすることである。

②自体は浄源が澄観から受け継いだものである。しかし、『華厳経疏』の原文の引用された箇所と全体のテキストの文脈との関係から見ると、澄観がかれらの言葉をもって直接「不真空論」に言及していたわけではない。浄源の捉え方と扱う場所によって、これらの言葉に含められる意味は更に強く現われている。そして、このような「不真空」に対する解釈は、僧肇自身のそれとは全く逆の方向へ向かっているといってよい。特に「不真空」は「不真空論」の最大なキーワードであるという点から考えれば、これらの言葉は浄源疏の本質的な部分を指し示すものと考えなければならない。

しかし、③の「真空」と「妙有」の関係から考えれば、問題はさらに複雑になる。浄源の「妙有の真空」の意味は、すなわち妙有へと発展する真空、或いは妙有と本質的に異ならない真空と理解したほうがいいと思われるが、「妙有の真空」の「真空」は本体論的な意味をもっているものであるのに対して、Bの「不真空」からの「真空」は「空に対する正しい理解」のことであるから、認識論的な術語であるといってよ

NACSIS-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

い。従って、この認識論における「真空」が本体論における「真空」へと展開すると、一つの論理的な問題が生じてくる可能性がある。

第三に、浄源が「妙有」と「真空」とを関連させて、「幻有」に対応することは、法蔵・宗密の影響をうけたことである。上の浄源が引用した澄観の原文には、「妙有」を用いてはいないが、法蔵と宗密の著作には、「妙有」がしばしば出てくる。この点については、木村清孝先生の優れた論文があり、大いに参考になる。(4)

最後に、AとBの両系統を比較した結果として、以下の結論を纏めることができる。すなわち、Aは、「非実有」と「幻有」などの概念を用いて、僧肇の諸法の非真実性を見出して、そこから空の結論を打ち出す段階と大体同じである。Bは「不空空」、「妙有」、「真空」などの概念を用いて、澄観・宗密などの華厳と神会の禅との接点が見られて、浄源が提唱している空を支える真如・一心の世界に当たっている。

この一心思想がもともと『不真空論』に含まれていたことを裏付けるために、浄源は僧肇の「是以聖人、乗真心而理順、則無滞而不通」という言葉のなかにある「真心に乗じて理に順ずる」の「真心」は、すなわち「妙明の真心」であると解釈している。

即妙明真心、非集起縁慮之心。(中呉集解・不真空)

そして、この真心について、さらに解釈を加えている。

心常住真心也。体絶妄想故不有、霊照独故不無(中呉集解・不真空)

また、「本源の妙心、諸々の對待を絶する」といい、この真心を万物の起源と見なし、相対性を超える超越的な根元であると主張している。

浄源にとって、この空を支えて常に実在している妙明の真心は『肇論』の全体から見ても『肇論』の中心点をなすものであると考えられている。これは次の言葉によって明らかにされている。

宗本之要、其妙明真心乎。(中呉集解・宗本義)

要するに、『肇論』の要点は「妙明の真心」であり、或いは、その本旨は真心を明らかにすることであるという。

1 大正四十五、一五二、下
2 大正四十五、一七〇、上―下
3 大正四十五、六〇四、中・二十八―下・四
4 木村清孝「真空妙有論の形成と展開」『東アジア仏教の基礎構造』(春秋社)に所収。

〈キーワード〉宋代華厳宗、浄源、僧肇、不真空、真心

(国際仏教学大学院大学博士課程)

NACSIS-Electronic Library Service